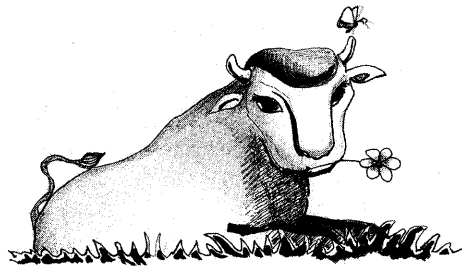


『食べることの思想』

戸井田道三 著（筑摩書房 一九八八）

森下みさ子



なにか考え事をしているとき、時として知らぬまに唇を触っている。そんなへんな癖に気付いたのは、少し前のことである。考えがまとまらない。うまく言葉にならない。「ああ、そうか。こういうことだ。」とわかる手前の、なんともおぼつかないフヤフヤした感じに漂いながら、なぜか唇を柔らかく刺激している。皮膚とも粘膜とも定

めがたい、このあかいふたひらのものを刺激することが、思考をかたちづくることにつながるのだろうか。

そういえば、これに近い感じを、ブディングをつくっているときに受けることがある。熱が加わるにしたがって、サラサラと形のなかった液体が次第にトロトロと固体に近づいていく。木べらか

ら指先に伝わってくるかすかな抵抗。ふつつつと泡立ちながら、形になろうとする液体が伝える微妙な抵抗感である。できあがったブディングは、形をなしてはいるものの少しゆらしたただけでフルフルとふるえる。唇にもっていくと、かすかな摩擦を残しその奥に滑り込んでいく。離乳食か病人食に近いこのあやふやな感じは、思考が形をとりはじめ、言葉が生まれるときの瞬間を、食べ物として唇をとおして伝えているようにも思える。

思考がつかめたり、言葉が伝えられたりするの
は、形があるからだ。それ以前は、どんな感じなのだろうと、唇を触りながら考えてみる。……もしかしたら、できかかったブディングのようなものではないだろうか。

*

この本の著者は、それを赤ん坊のおしゃぶりにかんじとる。乳汁でおなかを満たすわけでもなく、赤ん坊はよく乳首やおしゃぶりをしゃぶる。

「しゃぶる」は、唇や舌の古語にあたるシハに「触る」が付いてできた言葉であるという。唇や舌の刺激行為という点では、「しゃぶる」に近い言葉は「しゃべる」である。赤ん坊はしゃぶる行為をしつづけながら、片方ではしゃべりはじめる。ただし、この最初のおしゃべりは、まだはっきりした意味も形もなしていない。何かわけのわからない、言葉以前のコトバである。「しゃべる」は型以前であって、幼児が物をしゃぶる、ことによつて認識するような混沌をのみこんでいる。」

それなら、その混沌のなかから形が現れ、言葉が生まれ、ものごとがわかたれて「わかる」ようになるのは、どういう契機によるのだろう。著者は、おしゃぶりに残された小さな歯型を見落としたりはしない。しゃぶる行為は、やがて小さな歯が生えてくるにしたがって「噛む」行為を促すようになる。しゃぶるよりもより積極的なものへの取り組み。「おおげさにいえば子供の自我のめざめ」

であると、著者はそこに深い亀裂をみてとる。それは子供が自我なるものをたちあがらせる喜ばしい契機であり、同時に母と密着した共生状態から切れる悲しい体験でもあるのだ。著者は続けていう。「母親が『痛い』と叫んで乳首を子供の口から引き離す、と同時にその痛みに耐えることでしか子供は自我の芽ばえにあずかりえない」と……。乳首をとおして互いにわかちがたく快感を共有していた母親と赤ん坊は、痛さとそれに伴う拒否の動作によってわかたれる。入り込んできた「噛む」行為……それは型をつけることになり、同時にしゃべるは型化を経て、語る行為に結び付いていく。

著者は、これらのことを論理の積み上げによって述べているわけでない。実証的な例を連ねているわけでもない。ただ、赤ん坊の体の感覚にまでさかのぼってわかろうとする。その無垢な体感のなかから、人間存在の根源にある何か、構造とも

いえるものが形を現してくる。すべての人間の根っこにあって、それだけに意識されないもの、そこに赤ん坊の感覚をもって入り込んでいこうとする。あえて名付ければ、意識が生まれてくる場を探ろうとする「胎生」学の方法といえるだろうか。「食べること」は、すべての人間に共通な体験であり、同時に様々な型を生むものである。著者の胎生学のいざないは、それだけの迫力をもって根っこへとむかっている。

*

この本は、長年能や狂言の研究にいそしみ、文学・芸能・民俗と、文化の型を思索の対象としてきた、ひとりの老学者の最晩年に書かれた。遺作ともとれる作品である。老人は限りなく赤ん坊に近づく。実際、八十に手が届かんとしていた著者は、文字どおり身をもって、人間が社会・文化の地平に形作られてくるときの道程を再認しえたのではないだろうか。饅頭や握り飯を対象に、みず

からが「しゃぶる」行為を繰り返してわかりえたことを、思想の言葉へと型化した。その菌型のな

んと繊細であることか……。

(東京学芸大学非常勤講師)

ベンヤミン著作集12

『ベルリンの幼年時代』

ヴァルター・ベンヤミン 著

小寺昭二郎 編集解説(晶文社 一九八五)

彌永 信美

ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』という本を最初に教えてくれたのは、数年前のぼくの婚約者——すなわちいま、共に生活しているぼくの妻だった。これが婚約時代の幸せな記憶に深く結びついた本だということが、ぼくのなかでこの本に特別な意味を持たせているのを否定することは

できない。しかし、こうした個人的な想いはるかに越えたところに、この本の真の価値はある。

ショーレムの美しい友情に満ちた評伝『我が友ベンヤミン』(野村修訳、晶文社)によれば、ベンヤミンは、これを書いていた時——より正確には、ここに収められた『ベルリン年代記』を執筆